

## 派生名詞の $\theta$ 役付与について

大 門 樹 久 世

動詞が名詞化された場合、もともと動詞が持っていた項が、その名詞化された語を含む文中にもそのまま現れる。

- (1) a. John permitted Mary to leave.  
 b. John gave permission to Mary to leave.

(1 a) では、permit は動詞として現れており、(1 b) では permit の名詞化形である permission は host verb (ここでは gave) の直接目的語となっているが、John, Mary, to leave は、どちらの文でも同じ  $\theta$  役を持っていると考えられる。つまり名詞である permission が、文中の  $\theta$  役付与に影響を及していると考えられる。ここでの重要点は、派生名詞の項は、それが主要部 (head) となっている NP の中で具現化されないで、その派生名詞を補部としてとる動詞 (以下 host verb) の主語、あるいは VP 中の補部として現れている点である。

ここでは、この点について Jayaseelan (1988) を考察しその問題点を指摘し、解決法を示唆することを目的とする。第1節では Jayaseelan の提案を分析し、第2節では、その問題点と解決法を提案し、第3節では、まとめをする。

### 1 Jayaseelan (1988)

(1) の例文に関して、(1 b) の permission の項はそれが主要部となっている NP の中では現れていない。(1 b) の John は host verb である give の主語で、Mary は give の間接目的語である。Jayaseelan はこの点に注目し、ここでの問題点を4つ<sup>(1)</sup>あげている。

問題1—名詞類はどのようにして、その最大投射外の項に  $\theta$  役付与する

のか。Chomsky (1981) では、一般的に句の主要部がその補部にのみ  $\theta$  役付与するとしており、文の主語の位置のみ例外で、動詞により間接的に  $\theta$  役付与されるとしている。しかしこの考え方では、(1 b) のような現象である最大投射の外へ影響を及している文については説明できない。

問題2—host verb と名詞類両方が  $\theta$  役付与するとはどういうことか。host verb も  $\theta$  役付与に関与していることを示す1例として、(1 b) の give を receive に換える。

(2) Mary received permission from John to leave.

(1 b) と (2) を比べると、give と receive の項構造の変化に伴い、項の現れる位置が変わることがわかる。つまり host verb も  $\theta$  役付与に関与しているということである。そうすると (1 b) の John は host verb である give からも、派生名詞 permission からも source の  $\theta$  役が与えられていることになる。Chomsky (1981) では1つの項に2つの  $\theta$  役が与えられることを  $\theta$  基準で排除している。そうすると give, permission の2つの  $\theta$  役付与子からそれぞれ  $\theta$  役が与えられていると考えられるこれらの文は、非文であるということになってしまう。

問題3—一句の主要部によって  $\theta$  役付与されていない補部が存在するのだろうか。Chomsky (1981) では、 $\theta$  役は主要部によりその補部に与えられるとしているが、この考え方では、(1 b) のように、permission がそれが主要部となっている NP の中で  $\theta$  役付与をせず、その外へ  $\theta$  役付与している例は説明できない。この例の  $\theta$  役付与はどのようになされるのかが問題となる。

問題4—Chomsky (1981) のように主要部がその補部に  $\theta$  役を与えるという考え方をすると、補部であるにもかかわらず  $\theta$  役が与えられない項がある文が存在することになる。例えば、host verb の項構造が収容できる以上の項を派生名詞が持っている場合を考える。

(1 b) John gave permission to Mary to leave.

(3) a. John made an offer of money to Mary.

b. John felt hatred toward Mary.

構成素テスト (constituency test)<sup>(2)</sup> の結果, 下線部は名詞類の補部ではないことがわかる。従って host verb の補部なのであるが, host verb がθ役付与できるのは, これらの動詞の場合は3つである。(1 b) を例にとれば, give がθ役付与できるのは, John, permission, to Mary である。従って give の補部であるにもかかわらずθ役を受けられない句があることになる。これは明らかに Chomsky の主要部によるθ役付与の考え方では説明できないものである。

これらの問題を考え, Jayaseelan は次のような提案をしている。

派生名詞の項が, それが主要部となっている NP 以外に現れる現象を“PROMOTION”として説明している。

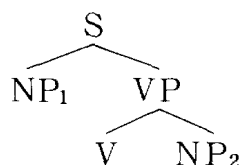
#### (4) PROMOTION

名詞の項はさらに高い最大投射の項の位置に promote される。

promote された項がどこに現れるかは, host verb の項構造によって決定される。また promote された名詞類のθ役を持っている項は host verb のθ項として現れなければならない。例えば(1 a) では permit の主語である John は source のθ役, 目的語の Mary は Goal のθ役を持っている。つまり permit は source と Goal の項を持つ動詞である<sup>(3)</sup>。しかし(1 b) では派生名詞の permission は各々のθ役を NP 内には付与する場所がないので promote させ, 結果として host verb である give の主語の位置つまり John (give の source 項の現れる位置) に permit の source 役を付与し, give の目的語の位置つまり Mary (give の Goal 項) に permit の Goal 役を付与する。

θ役付与を Chomsky (1981) で述べているように主要部から補部への付与だとすると, この複合述語の現象は一見例外のように思われるかもしれないが, Chomsky (1981) のθ役付与の方法の中にも例外的な付与の方法があった。それは主語へのθ役付与である。

(5)



V は NP<sub>2</sub> には直接 θ 役付与にするが、NP<sub>1</sub> には間接的に θ 役付与する<sup>(4)</sup>。

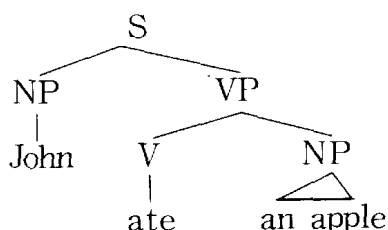
統率・束縛理論 (Government and Binding Theory 以下 GB) では、通常項への θ 役付与は主要部が行なうものであり、例外的に主語への θ 役付与は、VP により合成的に行なわれると仮定されている。Jayaseelan はこの合成的 θ 役付与を一般化し内項にも適用している。

- (6) A.  $\theta$ -marking is strictly local. This entails that except at the lowest level (e.g., level of V and its sister),  $\theta$ -marking is done by a phrasal node.
- B. The  $\theta$ -frame of a phrasal node is determined compositionally by its elements.<sup>(5)</sup>

では実際に Jayaseelan の仮定している合成的な θ 役付与の方法を検討する。まず単純な文を見してみる。

(7) John ate an apple.

(7)'



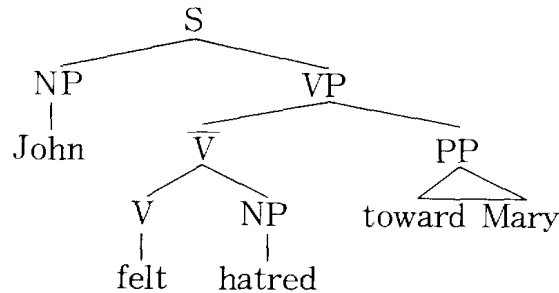
まず eat は an apple に θ 役として Theme (あるいは Patient) を与える。この時点では eat が持っているもう 1 つの θ 役である Agent は付与されない。なぜなら θ 役付与は (6) にあったように厳密に局所的であるので、局所的な位置にあるものにしか付与されない。そこで eat はその Agent θ 役を VP にまで promote する。一方 an apple の方は付与すべき θ 役はないので promote するものはない。従って VP の θ 枠は Agent 1 つとなる。

この VP に対して NP は局所的であるので、ここで VP が NP に Agent を付与する。このようにして eat は John と an apple にそれぞれ θ 役付与する。

次にここで取りあげられている複合述部構文を見てみる。

(4 b) John felt hatred toward Mary

(4 b')



feel は [Experiencer, Theme] の θ 役を持っているが、Theme を hatred に付与し残りの Experiencer は V に promote される。hatred は [Experiencer, Goal] の θ 役を持っているが局所的にはどちらも付与される位置がないので、両方共  $\bar{V}$  に promote される。従って  $\bar{V}$  節点は [Experiencer] と [Experiencer, Goal] という θ 枠になるが、両者に共通の Experiencer は重ね (Superimpose) られ [Experiencer, Goal] という θ 枠を  $\bar{V}$  は最終的に持っていることになる。そして  $\bar{V}$  は toward Mary に Goal を付与し、Experiencer を VP に promote する。VP が主語に Experiencer を付与する。

以上のように、最初あげられていた問題点をこの提案を使用することにより解決できた。まず、第 1 の問題点であった派生名詞がそれが主要部である最大投射の外にも θ 役付与をしているという点については、次のように説明できるようになった。(4 b) を例にとれば、派生名詞である hatred は John と toward Mary に間接的に θ 役付与する。つまり hatred の θ 枠と feel の θ 枠が  $\bar{V}$  及び VP に promote され、 $\bar{V}$  により Goal が、VP により Experiencer がそれぞれ合成的に付与されるのである。

問題 2 の host verb と派生名詞から 2 重に θ 役付与がされているという問題に関しては、この提案によれば、例えば (4 b) の John は、feel と hatred から 2 重に θ 役付与されるのではなく、1 つの範疇つまり VP により θ 役付与されることになり問題はなくなる。

問題3の主要部Nが $\theta$ 役付与子ではないので主要部が補部に $\theta$ 役付与するという条件にあてはまらないという問題及び問題4の例文(3b)において toward Mary は host verb の補部であるにもかかわらず、その主要部により $\theta$ 役付与さるないという2つの問題に関してはこの提案では次のように考えられる。これまで動詞の補部と考えていた句は、それぞれ句範 $\bar{V}$ の補部であるとする。例えば、toward Mary は host verb の補部ではなく句範 $\bar{V}$ の補部である。従って $\bar{V}$ が $\theta$ 役付与する。

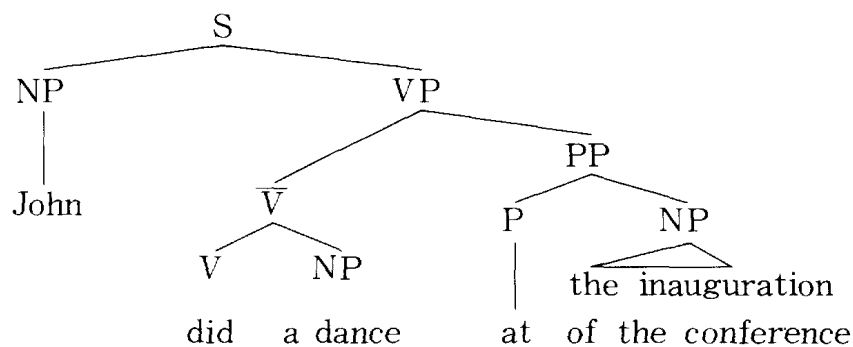
以上のように最初に提示された4つの問題は Jayaseelan の提案により、それぞれ解決された。

しかし、すべての節点から promote できるとすると問題となる文があるため、Jayaseelan は promotion に対して次のように制約を加えている。

- (8) There are severe restrictions on promotion from the nonpredicative daughter node<sup>(6)</sup>

次の文を考える。

- (9) John did a dance at the inauguration of the conference  
(9)'



まず do は [Agent, Theme] を持っており Theme を dance に付与し、Agent を $\bar{V}$ に promote する。dance は Agent $\theta$ 役を持っているが、NP内ではそれを付与できないので $\bar{V}$ へ promote する。 $\bar{V}$ で2つの Agent が重ねられるので $\bar{V}$ は Agent $\theta$ 役を持つことになる。PP内をみると、at は location の $\theta$ 役を持っており NPにその location を付与する。NPの inauguration は Agent を持っているが、NP内ではそれを付与できないのでPPへ promote する。その結果 VPには $\bar{V}$ からの Agent と、PPからの

Agent が promote され, その2つの Agent が VP で重ねられ, 主語 NP に Agent が付与されることになる。この結果としてこの文は, 次の2つの意味を持つことになる。

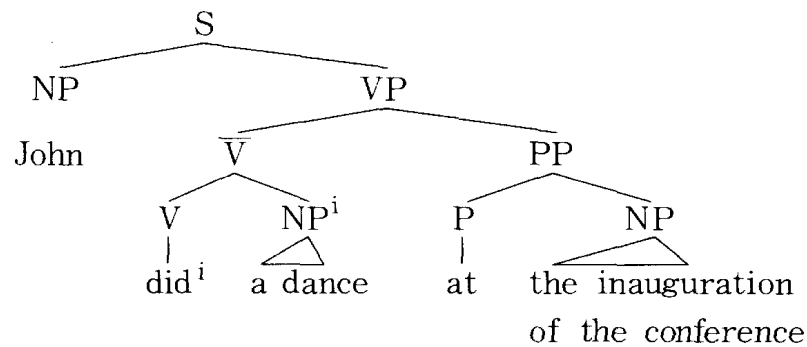
- (10) a. John は (唯かが開催した) 会議の開会式でダンスをした。  
 b. John は (自分が開催した) 会議の開会式でダンスをした。

つまり  $\bar{V}$  から promote された Agent は did a dance により付与されたθ役である。従って (a) の解釈がなされ, PP から promote された Agent は, inauguration から promote された Agent である。従って (b) の解釈が派生される。しかし実際に (9) の文は (a) の意味しか持っておらず, (b) の解釈はあり得ない。この結果言えることは, 前置詞の目的語の位置からの promotion は許されないということである。この事実から Jayaseelan は次のように仮定している。

- (11) Promotion from a nonpredicative daughter node is possible only from the direct object position.<sup>(7)</sup>

さらにこの事実を説明するため次のような提案をしている。主語と直接目的語は文法関係が制限されていないが一方, to-NP の NP は Goal, on-NP の NP は Location というように, PP の場合は文脈で決定されると言ってもよい。つまり, 直接目的語のθ役は動詞の意味によって決定され, 主語のθ役は VP の意味により決定されるということである。すなわち直接目的語は動詞によってθ役付与され, 主語は VP によってθ役付与される。一方意味的に制限された前置詞を持つ PP はθ役付与されず, 違った方法で付与されると Jayaseelan は提案している。そして語彙範疇による直接θ役付与を意味的同一指標付け (thematic coindexing) を使って説明している。この意味的同一指標付けというのは, 語彙範疇に統率され直接θ役付与されている NP か S はその統率子の上付指標 (superscript) が付与されているというものである<sup>(8)</sup>。従って (9) は意味的同一指標付けされ (9'') のようになる。

(9'')



a dance は did により  $\theta$  役付与されるので did と同一上付指標付けされており, the inauguration of the conference は語彙範疇によっては  $\theta$  役付与されていないので同一上付指標付けはされていない。また John は直接  $\theta$  役付与されないので上付指標はない。この考えを導入し, promotion の条件を次のような原則として示している。

## (12) Principle

The  $\theta$ -frame of a phrasal node is the union of the sets of  $\theta$ -roles promoted from the daughter nodes, where these are thematically co-indexed; otherwise, it is the set of  $\theta$ -roles promoted from the predicative daughter node.<sup>(9)</sup>

もう1度 (9'') に戻ると, did と a dance は意味的に同一指標付けされている。従って  $\bar{V}$  の  $\theta$  枠はその両方の娘節点から promote される。しかし  $\bar{V}$  と PP においては, これらは意味的に同一指標付けされていない。従って VP の  $\theta$  枠には, 述部娘節点 (predicative daughter node) である V からのみ  $\theta$  役が promote される。つまり  $\bar{V}$  は did と a dance から promote された Agent のみを promote するのである。従って VP が NP に Agent を付与する時その意味は, (10 a) の意味であり, (10 b) のように解釈はされないと説明している。以上のように PP からの promotion は不可能であるという条件とその考え方を説明している。

さらに promotion に対してもう1つの制約が提案されている。

(13) John witnessed the bombing of the city.

(14) John did the bombing of the city.



bombing は2つのθ役を与えるが、そのうちの1つである Theme (又は patient) は NP 内で付与され、もう1つのθ役である Agent は  $\bar{V}$  に promote される。 $\bar{V}$  節点で、(12) では witness, (13) では did から promote された Agent がそれぞれ、bombing から promote された Agent と重ね合わされるはずである。(13) では、その重ね合わされた Agent が VP によって John に与えられる。これは問題はない。しかし(12)も同じように重ね合わされた Agent が VP によって John に与えられるはずだが、こうなると次の2つの解釈が可能になる。つまり、`ジョンは (唯かが爆撃した) 町の爆撃を見た` という解釈と `ジョンは (ジョン自身が爆撃した) 町の爆撃を見た` という解釈だが、後者の解釈はこの文にはない。

同様な例として (15) がある。

- (15) John condemned the condemnation of capital punishment

condemn は2つのθ役を持っているがそのうちの1つである Theme は NP の中で付与され、もう1つのθ役 Agent は VP に promote される。そこで動詞 condemn から promote された Agent と重ね合わされ、John に付与される。ここでも2つの解釈が可能になってしまう。つまり `ジョンが (唯かが行かった) 死刑に対する非難を非難した` という解釈と、`ジョンが (自分が行なった) 死刑に対する非難を非難した` という解釈だが、後者の解釈はあり得ない。従ってここでも NP からの promotion を阻止する条件が必要となる。

ある NP からは promote されるが、ある NP からは promote されない事実の説明として Jayaseelan は host verb の特性の違いで区別している。Source, Goal, Location をそのθ枠に持つ動詞や抽象動詞 (do など) は複合述部構文の host verb として振まう。つまりこの動詞の場合には NP からの promotion が可能である。しかし、知覚動詞 (witness, observe, see, etc) や言及動詞 (condemn, report) は host verb としての機能は果たさない。この場合には NP からの promotion は不可能である。(13) (15) の場合、動詞は知覚動詞なので NP からの promotion は行われない。反対に (14) の場合動詞は do なので、NP からの promotion は可能

である。このように2つの制約が promotion に対して提案されている。

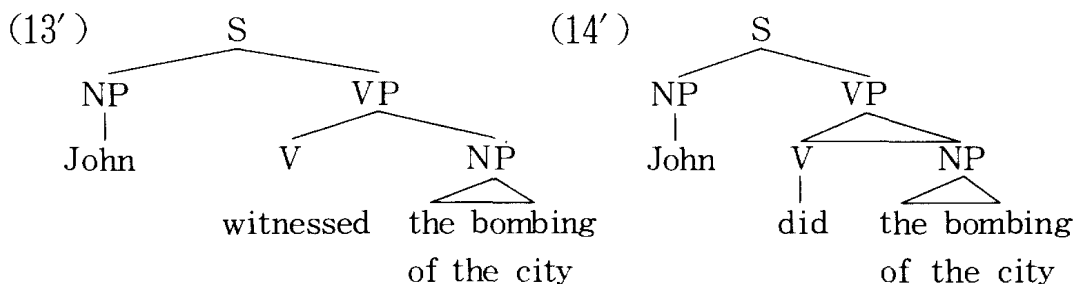
以上 Jayaseelan の分析を考察した。次に2節では Jayaseelan の分析の問題点を指摘しその解決法を示唆する。

## 2. Jayaseelan の問題点とその解決法

Jayaseelan 分析の問題点は promotion ができる場合とできない場合の区別が ad hoc に規定されている点である。promotion ができない範疇を持つ文と、ここで問題とした複合述部を持つ文は構造的には変わりがない。

(13) John witnessed the bombing of the city.

(14) John did the bombing of the city.



(13') (14') からわかるように構造的にはかわりがないのに (13') では NP からの promotion はできずに (14') では promotion が可能である。このように同じ構造であるにもかかわらず一方では許されもう一方では許されないという説明は適切ではない。さらに (13') (14') の違いを説明するのに構造ではなく動詞の種類によって区別しているが、その区別のし方があいまいである。例えば, source, Goal, Location といった  $\theta$  枠を持っている動詞は host verb の働きをするといっていた。つまりその動詞を持つ文の NP からは promotion が可能であるはずである。

(16) John put the broken glasses on the table.

put の  $\theta$  枠には Location (あるいは Goal) が含まれている。Jayaseelan の分析によるとこの put は host verb として働くことになる。つまり NP, ここでは the broken glasses からの promotion は可能なはずであ

る。put の Agent と broken から promote された Agent が重なり、John に付与される。ここでの意味解釈としては、“ジョンが (自分がこわした) 眼鏡をテーブルにおいた” という解釈になる。しかしこの文には、“ジョンが (他の人がこわした) 眼鏡をテーブルにおいた” という解釈も可能である。この解釈を可能にするためには、NP からの Agent の promotion を阻止しなければならない。つまり Location のθ枠を含む動詞であっても、NP からの promotion をしない場合もあることになる。1つの動詞で NP からの promotion ができる場合とできない場合があるのは不自然である。すなわち Jayaseelan の動詞の区別は適切ではない。

また Jayaseelan では (13) のように NP からの promotion が不可能な文は例外的であるように扱っているが、この型の文は他にも多い。

(16) John put the broken glasses on the table.

(17) John gave the folded paper to me.

非常に数が限られている場合は例外として扱う場合もあるが (16) (17) のような例は生産的である。従ってこの型の文を例外として扱うのではなく適切な説明をしなければならない。

以上のように解決しなければならない問題はあるが、promotion という基本的な機構は適切である。まず (1 a, b) で明らかのように、

(1) a. John permitted Mary to leave.

b. John gave permission to Mary to leave.

permission はその最大投射である NP を越えてθ役付与している。つまり NP 内で主要部がその補部にθ役付与する関係は守られていない。Chomsky (1981) では主要部がその補部にθ役付与すると仮定していたので、この考え方では (1 a, b) の違いを説明できない。例えば (1 b) で give のθ枠は [Source, Theme, Goal] である。もし Chomsky の考え方に従い主要部がその補部にθ役付与するなら give が permission に Theme を、そして to Mary に Goal を付与し、VP が John に間接的に Source をθ役付与することになる。しかしこの文には to leave がある。これは前述のように give の補部である。つまり give はその補部である

to leave に  $\theta$  役付与しないことになる。これは Chomsky の  $\theta$  基準—全ての項には  $\theta$  役付与されなければならない—に反する。従って非文となるはずであるが、実際には正しい文である。Chomsky (1981) の考え方ではこれらの複合動詞を含む文は正しく説明できない。

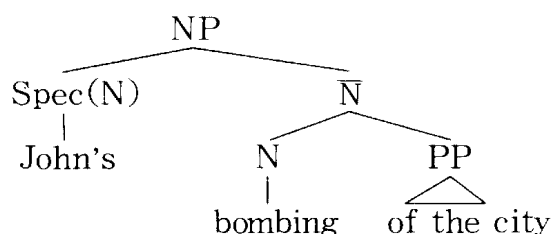
それに対して Jayaseelan の分析では語彙範疇のみが  $\theta$  役付与するのではなく句範疇も  $\theta$  役付与するので、動詞と派生名詞の意味を両方含んで  $\theta$  役付与する。従って (1 b) の説明も適切に出来る。

さらに、Chomsky (1981) では、動詞の補部への  $\theta$  役付与と主語への  $\theta$  役付与の方法が異なっていた。補部への  $\theta$  役付与は動詞が直接付与し、主語へは、間接的に動詞が付与する方法であった。しかし Jayaseelan はすべての  $\theta$  役付与は合成的に行なわれる。つまり Chomsky (1981) でいう主語への  $\theta$  役付与のように行なわれると提案している。これは  $\theta$  役付与を例外なく一様に取り扱うことができるようになった点で好ましい方向だといえる。

では基本的には Jayaseelan の分析を使用し、なお問題を克服するような方法を考えてみたい。Jayaseelan では外的  $\theta$  役、内的  $\theta$  役を一括して扱っていたが、以下では両者を区別して取り扱うことによって Jayaseelan の分析が持つ問題をすべて解決できることを示す。

一般に NP において、Spec (N) の位置は、外項が生じうる位置である。

(18)



(18) では bomb の持つ  $\theta$  役 Agent は Spec(N) の John's に付与されている。このことから Spec(N) の位置は外的  $\theta$  役が付与されうる位置であると考えられる。外的  $\theta$  役が音形を持つ要素によっては具現されない場合でも空範疇として具現されていると考える。ここではその範疇を PRO であると仮定する<sup>(10)</sup>。N が持つ Agent または外項はこの PRO に付与されることで NP 内で満た (saturate) される。PRO が現れない場合にはその外的  $\theta$

役は (19) のように by 一句に付与される。

(19) the destruction of Rome *by John*.

これに対して内項の場合には内項が付与されうる位置に PRO が生じ得ないので顕示的な形で具現化されない時には NP をこえて promote されるのである。但し c—統御及び統率の定義はそれぞれ (20) (21) とする。

(20) c—統御

$\alpha$  は次の場合に  $\beta$  を c—統御する

$\alpha$  を支配している最初の節点が  $\beta$  も支配し、かつ、 $\alpha$  が  $\beta$  を支配していない場合

(21) 統率

$\alpha$  は次の場合に  $\beta$  を統率する

(i)  $\alpha$  が  $\beta$  を c—統御している

(ii)  $\alpha$  は語彙範疇

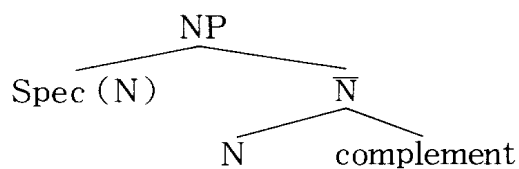
但し

$\alpha \cdots [\beta \cdots \delta \cdots]$  ( $\beta = X^{\max}$ )

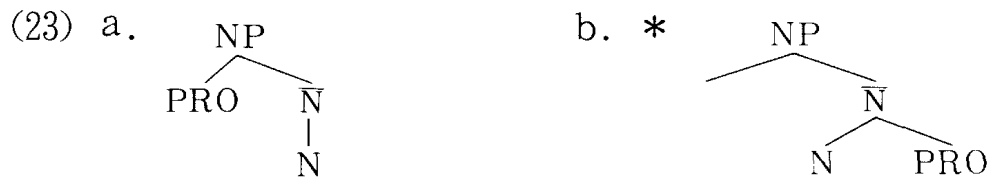
の環境では、 $\alpha$  は  $\delta$  を統率できないと仮定する。

(21) の統率の定義により、(22) において N は Spec(N) の位置は統率しないが、補部の位置は統率することになる。

(22)



その結果 PRO は Spec(N) の位置に生じることができ、補部の位置には現れ得ない。



Jayaseelan が問題としていた例 (1 b) は、次のように説明される。

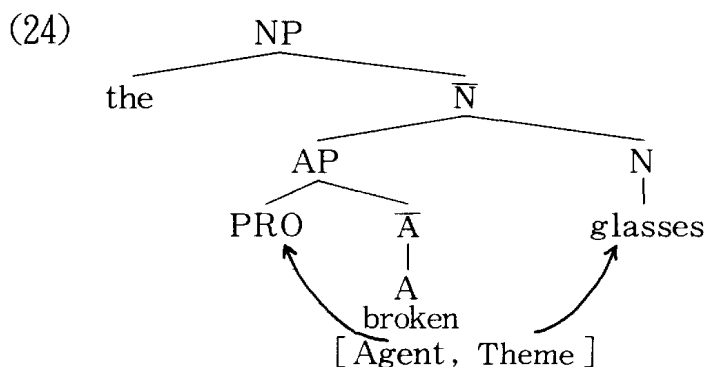
(1 b) John gave permission to Mary to leave.

permission の与える 2 つの内的  $\theta$  役 Goal と Theme は PRO として具現することができないので、NP を越えて promote され、 $\bar{V}$  の姉妹として具現化される。一方外的  $\theta$  役, Agent は、NP 内で PRO として具現するので、NP を越えての promotion は生じない。PRO の先行詞に関しては、コントロール理論が決定するものとする。

次に Jayaseelan の分析に対して反例となった (1 b) のような文が、ここでの分析でどのように取り扱われるかを見てみる。

(16) John put the broken glasses on the table.

break のもつ内的  $\theta$  役 Theme は AP 内で具現されないので promote され主要部 N の glasses に付与される。一方 break のもつ外的  $\theta$  役は AP 内で Spec(A) の位置に付与されその結果 PRO として具現される。



外項は PRO として具現されない場合には (25) のように by 一句として具現される。

(25) the glasses broken by John

これは NP の場合と全く平行的である。従って外的  $\theta$  役付与は NP だけで

なく、APを越えることはできないと言える。

以上のように、内項と外項を分け、NPとAPのSpecの位置にPROを仮定することにより、Jayaseelanが解決できなかった問題を解決できた。

### 3. ま と め

ここでは派生名詞がその最大投射を越えて $\theta$ 役付与している現象に関して、Jayaseelanの分析を検当しその問題点を指摘した。その問題点は、内項と外項を区別することにより説明された。つまり外項はその最大投射内で $\theta$ 役付与され、内項はその最大投射内には $\theta$ 役を付与する位置がないため promote されるのである。このように、基本的にはJayaseelanの提案した promotion を仮定し、さらにJayaseelanの提案での問題点を、克服することができた。

### 注

- (1) Jayaseelan (1988) では3つの問題があるとして提示してあるが、実際には4つの問題を取り扱っていると考えられるのでここでは4つを問題としてあげた。尚、問題4がJayaseelanが1つの項目としてあげていなかった問題である。
- (2) 構成素テストの例として wh 句化して前置できるか、あるいは副詞を to leaveの前に入れることができるかどうかというテストがある。詳しくは Jayaseelan (1988) pp.96~97 参照のこと。
- (3) to leave は permit の項ではあるが、後で考える問題点を含んでいるのでここではふれない。
- (4) LGB の 2 章 2. 2 節参照
- (5) Jayaseelan (1988) p98 参照
- (6) Jayaseelan (1988) p102 ①31 参照
- (7) Jayaseelan (1988) p03 ①12 参照
- (8) Chomsky (1986 a) Rouveret and Vergnaud (1980) 参照
- (9) Jayaseelan (1988) p104
- (10) 同様の仮定は Roeper (1987) でもなされている。

### 参 考 文 献

Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht.

——. (1986 a). *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Jayaseelan, K.A (1988) "Complex Predicates and  $\theta$ -theory." In W. Wilkins  
(ed.) *Syntax and Semantics* 21, 91–111 Academic Press, New York

Roeper, T. (1987) "Implicit arguments." *Linguistic Inquiry* 18, 267–310